

アイキャンだより

2004年11月
第36号



特集:フィリピンを訪れる

フィリピン海外研修プログラム報告 P2-3

海外研修プログラム 小笠原敬一

日本からパヤタスを訪れて P4-5

スタディツアーに参加して 白石真里
フィリピン見聞記 新田目夏実

マニラ日本人学校の生徒さんより P6-7

池田英彦、二ノ宮将吾

マニラボランティア紹介 佐久間亮

2004年ミンダナオ訪問 P8-9

感銘を受けたジェネラルサント 伊東伸明

初心者のためのフィリピン講座 P10

春のスタディツアーのお知らせ

新規会員、会員継続者、寄付者のご紹介 P11

カードキャンペーンのお知らせ

会員になって ICAN を支えよう! P12

クリスマス&年末募金キャンペーンのお願い



パヤタスの住民と日本からの訪問者

ICAN (アイキャン) 特定非営利活動法人アジア日本相互交流センター

〒450-0003 名古屋市中村区名駅南 1-20-11 NPO プラザなごや2F

TEL&FAX 052)582 2244 E-mail: info@ican.or.jp

ホームページ: <http://www.ican.or.jp/>

フィリピン海外研修プログラム 報告

2004年8月18日～24日の間に、海外研修プログラムのフィリピン訪問ツアーを行いました。今回は、国際理解教育の一環としてはじめて実施したフィリピン海外研修プログラムでした。渡航前には体験ワークショップ会や2回の事前学習会などを実施し、フィリピンに関する学習会をおこないました。事前の学習会に参加した11名のメンバーは、6泊7日の日程でマニラ首都圏やパヤタス地区を訪れ、現地でさまざまな体験をしました。

参加したメンバーは高校教諭、ボランティア団体職員、大学生などで、年齢も職業も様々でした。

海外研修～スケジュールと内容～

- 18日(水) 出発
19日(木) マニラ市内訪問
- 20日(金) パヤタス訪問
21日(土)
22日(日) マニラ市内訪問
振り返り会の準備
- 23日(月) 振り返り会
24日(火) 帰国
- 戦争の話を書く
・マカティ市内の高級ショッピングモールを訪れる
・TEDA(職業訓練校)の見学
- ・ゴミ山見学
・ICANのプログラム見学
・住民との交流会、ホームステイ
・パヤタス公立小学校訪問

3グループに分かれ、振り返り会の準備をする。
以下の4点を含めていれば、発表の仕方は自由。

- 1、見たこと
- 2、感じたこと・考えたこと
- 3、私たちがパヤタスの人々に伝えたいこと
- 4、私たちが日本に帰って伝えたいこと・したいこと

ツアーメンバーから住民グループへの発表
住民グループからツアーメンバーへの発表
意見交換会

* 渡航前開催した学習会です。

体験ワークショップ会

- 第1回 『国際理解教育って?』
地球家族を使ったフォトランゲージ
- 第2回 『貧困って?』
パヤタスロールプレイを使ったワークショップ
- 第3回 『グローバリゼーションって?』
バナナを通して考えるワークショップ

事前研修会

- 第1回
『パヤタスでの暮らし・マニラの暮らし』
- 第2回
『歴史の話
～現在のフィリピンの構造の背景として』

今回は研修の最後に参加者が自分たちが見たことや感じたことをまとめ、それをパヤタス住民(ICAN作業所の女性たち)に向けて発表するという、振り返り会を行いました。発表では自分たちの見たことや感じたことを、ロールプレイを用いたり、紙芝居のように絵と一緒に伝えたりしました。参加者は、自分たちが感じたことをどこまで正直に伝えたらいいのか、また、どう伝えたらいいのか、ということで悩む部分がたくさんあったようですが、発表の仕方を工夫したことで、住民にとっても分かりやすく、自分たちも伝えやすい表現をすることができました。

参加者からの発表を受けて、作業所の女性たちもグループに分かれて発表を行いました。発表の中では、自分たちが抱える問題や暮らしについて住民としてどう思っているか、ということや、暮らしの中で良いところは何か、足りないことは何か、ということ、日本人たちに対する気持ちなどが含まれていました。参加者にとっても、住民から「貧困」や「暮らしの中での大切なこと」について意見を聞くことができ、現場を訪問することでしかできない交流ができたのではないかと思います。



発表をする作業所の女性たち

フィリピン訪問ツアーを終え、日本ではワールドコロボフェスタ*でのステージ企画や、国際理解教育の授業づくりや実施などといったことで、メンバーそれぞれの現場で活動が展開されています。

今後のみなさんの活躍を楽しみにしています。

「夏の海外研修に参加して」

小笠原 敬一

強烈だった。生ゴミを完全に腐らせたようなにおい。車を降りたとたん、一気にそのにおいが襲ってきた。外にいても部屋にいても、いつもそのにおいが…。鼻をタオルで覆いたくなる衝動を必死に抑えた。

パヤタスへの訪問は自分なりに覚悟していたつもりだった。しかし、高く積まれたゴミ山を目の前にした時、実際にゴミ山でゴミを拾っている人を目にした時、診療プログラムで喘息の発作を起こした子供を見た時、そしてあのにおい、想像以上の現実に言葉にならなかった。確かに子供たちは元気で、人懐っこい。お母さんたちも前向きで底抜けに明るい。幸せそうな彼らの生活の中に、こうした現実があるのだと思うと、幸せとは何だろうかと考えてしまう。子供たちと遊んでいても、ふと彼らの将来を考えてしまう。パヤタス訪問中、気分は晴れなかった。どうしようもない無力感に襲われた。



発表の準備をするメンバー（一番左が小笠原さん）

そんな僕を前向きにさせたのが、参加者とのミーティングだった。それぞれが、感じたことを率直に話し、自分たちができることは何か、考えまとめた。自分の胸の内をさらけ出し、じっくり話し合う。自分の気持ちを整理するにはとても良い時間だった。ミーティングは深夜まで続いた。そしてまとめたものをパヤタスのお母さんたちにフィードバックした。お母さんたちは僕たちの話を真剣に聞いてくれた。なんだか繋がりを持てた気がする。フィードバックの中で僕は自分がやれることとして、自分の生徒に「パヤタスの現状を伝える」ことを宣言した。

そして今、僕は宣言どおり学校でパヤタスの現状を伝えている。生徒たちがどこまで現状を理解できたかはわからない。うまく伝わっているか不安になることもある。でも「パヤタスを見たからには責任がある。」という現地スタッフ伊藤さんの言葉を胸に、これからも伝えていくつもりだ。

先日、ホームステイしたVinaさんに手紙と写真を送った。彼女の息子Reyは元気になっているだろうか？テレビばかり見てないで、ちゃんと勉強しているだろうか？

この夏の海外研修はまだ僕の中で終わっていない。

帰国後の動きとして ～ワールドコラボフェスタへの参加～

海外研修終了後、10月末に名古屋で開催された国際協力イベント「ワールドコラボフェスタ2004」で、市民参加によるステージ企画が行われました。ICANもツアーメンバーを中心に、フィリピンで見てきたこと、考えたこと、日本に帰ってきて伝えたいことをまとめ、それを25分のステージの中で表現しました。

ステージでは、「映像」と「音楽」と「ことば」を使って、フィリピンの現状、パヤタスの現状を伝えました。今回の企画にはツアーメンバー以外にも、写真を直井保彦さん(*1)に、音楽を辻琢磨さん(*2)に、編集を村井陽介さん(*3)に協力していただきました。

製作された映像は貸出・販売等も行おう予定ですので、ご希望の方は事務局までお問い合わせください。

*1、直井保彦さん...東ティモール支援のNGO団体「環音」のメンバー。

夏の海外研修ツアーに同行し、写真の撮影をお願いしました。展示用に「パヤタスで暮らす人、働く人、遊ぶ子どもたち」などの写真を製作しました。

*2、辻琢磨さん...昨年の南山チャリティコンサートの時にオープニング映像作成で協力していただきました。使用された曲はこの夏に、トンドのスモーキーマウンテンにて子どもたちとワークショップで作り上げたオリジナルのものが使われています。

*3、村井陽介さん...名古屋大学大学院 国際開発研究科在籍。今回映像の編集をお願いしました。

日本からパヤタスを訪れて

この夏には、フィリピン海外研修以外にも、多くの日本人がパヤタスを訪れました。今回は訪問された方のうち、お二人の方から報告をいただきました。

一人目は、8月25日～31日までのスタディツアーに参加された高校生の白石真里さんです。

もうお一人は、フィリピン海外研修、後半のスタディツアーで、一緒にパヤタスを訪れ、フィリピンの社会構造などの話をしていただいた、拓殖大学助教授の新田目夏美さんです。

「スタディツアーに参加して」

白石 真里

私は今でも、フィリピンですごした6日間をはっきりと思い出すことができる。想像をはるかに超えるひどい悪臭、ごみの上に立っている密集した家々、マニラ湾に沈む夕日、子ども達の笑顔。

日本では得ることのできない体験が、そこではできた。この平穏な日本では想像もつかのような悲惨な状況が、当たり前のこととして受け入れられていた。



ハンバーガーショップで食事をする人たち
(マカティ市内にて)

パヤタスと都市部を見比べた時、私は「同じ人間なのになぜ？」という思いに胸をしめつけられた。フィリピンでは貧富の差が著しく、そのギャップはまさに天と地ほどであったのだ。一方では毎日豪華な食事をし、きれいな服を来て、何不自由なく暮らしているのに、他方では貧困と悪循環に苦しみ、毎日を必死に生きていた。なぜこれほどまでに差が生じるのだろうか？

私は今まで、“差”というものは国と国との間にあるものだと思っていた。もちろん、国内にも差はあるが、大きな問題になるほどではないと漠然と感じていた。だが、それは全く間違っていた。フィリピンの中には、命に関わるほどの“差”があった。国家のために努力してきた、同じ国民たちの間に、それほどの大きな差があることはとても信じがたいことだった。

私は帰国してからも、しばしばフィリピンのことを思い出している。パヤタスの人々は皆、笑顔で歓迎してくれた。彼らの笑顔を守り、彼らから得た大きな感動や現実の状況をより多くの人々に伝えるために、私は努力していこうと思う。まずは小さなことから始め、それを積み重ねていきたい。

最後になりましたが、とても有意義な時間を与えてくれた ICAN スタッフの方々に、非常に感謝しています。

ありがとうございました。



住民との交流会

「パヤタス見聞記」

新田目 夏実

以下、8月にパヤタスを訪れ、ビビアンさん宅に一泊したときに聞き取ったことの一部をつづってみます。

お世話になったビビアンさん宅は4人家族。子どもが二人。夫は近くの韓国系企業で守衛として働いています。下の子は小学生、上の子は高校4年生(フィリピンの高校は4年制です)。フィリピン南部のレイテ州出身で、故郷の歌謡曲を半分壊れたようなDVDで聞かせて(見せて)くれました。こどもはテレビで犬夜叉を見ていました。

椅子、カーテン、じゅうたん、テレビ、扇風機等、室内にあるめばしい家財は、ほとんどゴミの山から回収したものの再生品です。キッチンとトイレが別がありました。トイレはフィリピンのどこにでも見られる、手桶で自分で流す水洗型。煮炊きはケロシン油を使ったガスレンジ。小さな手押しポンプで空気を送り火をおこす、簡便なものです。

貧しい生活をどのように表現したらよいでしょうか。特に経済生活についてふれてみます。

ビビアンさんのご主人の収入(月3500ペソ、約7000円)は、土、日休みなく、朝10時から夜10時まで勤務して得たものです。一方、経常的な支出は、聞き取ることができたものだけでも、電気381ペソ、ガス360ペソ、水20ペソ、食費約2,000ペソ(私の推計)の計2761ペソ。これに加え、PTA会費、学生証、文房具代、制服代が必要です。夫が職場に通う交通費が月300ペソはかかることでしょう。さらに、被服費、医療費、日常的交際費および冠婚葬祭にかかわる臨時的支出も必要です(フィリピン人はお祭り好きです)。なにより、ビビアンさん宅は親戚のうちにただで住んでいるため、家賃を払っていません。全くのところ、たくわえというものはないそうです。ビビアンさんはICANの生計プログラムで仕事をして月2000ペソ収入を得ています。これとあわせても、夫婦で月6000ペソに満たないことになります。さらに時々ゴミ山で働いて得る臨時収入を加えても、マニラ首都圏平均の10分の1程度だと思われる。パヤタスのような経済的生活の不安定さは、単に所得が低いだけでなく、雇用が不安定であることで、ビビアンさんのご主人の場合は、これでもまだ安定しているほうです。



パヤタスの町並み



笑顔が素敵なビビアンさん

こんな苦しい毎日の中でも、ビビアンさんは、子ども達のクラスが週3日は朝6時からあるため、3時起きしてお弁当を作るということです。夫は今日も井戸水で水浴びをし、小さな鏡に向かい、髪にくしをあて、仕事に行くのです。

貧困を実感することは、今の日本人にとって難しいことです。スタディツアーはそんな私たちに、貴重な機会を与えてくれます。以上、短い報告ですが、パヤタスについて何か具体的なイメージを持ちたい方の役に立てば幸いです。

マニラ日本人学校の生徒さんより

マニラには日本人の子どもたちが通う、マニラ日本人学校(MJS)があります。毎年MJSでは子どもたちに募金を呼びかけています。昨年の募金はパヤタスで薬などを購入するためにご寄付いただきました。そして、今年もアイキャンを通してパヤタスに寄付したいというご連絡をいただきました。今年も募金を集める前に、パヤタスへ実際に行ってみて、何が必要とされているのかを知ってから、全校集会で募金を呼びかけることになり、7月24日に、総務会(児童生徒会)の子どもたちとその保護者と小関校長先生を始めとする引率の先生方をパヤタスにご案内いたしました。訪問後に子どもたちが書いてくれた感想文をここに紹介したいと思います。子どもたちの感性は本当に鋭く、本質を見抜く力を持っています。子どもたちから学ぶことは多々あります。(伊藤洋子)

「パヤタスに行って感じたこと」

池田 英彦

フィリピンは、アジアの発展途上国の一つである。そのフィリピンの中でもひととき、経済的に不利な人々が、生きるための糧を求めて集まり生活を営む場所の一つがパヤタスである。

そのパヤタスに僕達は行く機会に恵まれた。当初はパヤタスに募金をすることは決定したがパヤタスに行き現状を自分たちの目で確かめるという気は僕を含め全員が、全く持っていなかった。しかし、先生に実際にパヤタスに行き現状を自分たちの目で確かめたほうが、全校児童生徒にパヤタスの人たちの事を分かってもらえるのではないかと、現実を自分たちで見てこそ募金をする意義があるのではないかと示唆され段々とみんなの気持ちパヤタス訪問に傾いてきた。



パヤタスの子どもたち

そうこうして話はトントン拍子に進み、遂に七月二十四日パヤタスに僕達は行った。パヤタスは想像とは大分、異なる点があくつもあった。まず第一にゴミ山のある場所なのだから本当に遠い所なのだろうと思っていた。ところが、車に乗って一時間半もするとパヤタスに着いてしまった。このことから僕達はパヤタスのことを違う世界の話の様に受け止めている部分が大きかったが実はすぐに手が届く、という変だが行くのには充分、可能な距離にあるということだ。第二にパヤタスはそんなに臭くない。確かに臭いのは臭いのだろう。しかし気にしなければ無視できる程度の臭さである。しかし、ゴミ山付近となると、さすがにそうはいかない。確かに他の場所とは明らかに違う臭いがそこにはある。恐らく雨の日などは臭いがさらに増し、人家の方にまで降りてくるのだろう。

パヤタスに行って一番、印象に残りなおかつ楽しかったのは現地の子どもたちと遊んだことだ。彼等は常に笑顔だった。本当に嬉しそうな表情を常に絶やさず顔に浮かべていた。そんな彼等のことを見て幸福の量とお金の量は必ずしも関係していないのだな、と思った。

あやとりを彼等に教えたときも一生懸命に真似をしようと、自分から進んで教えてもらおうとしていた。

しかしICANの方達の話の聞いたり、彼等の服を見るとやはり貧困の様子が伝わってきた。そんな彼等のことを知った僕等のすべきことは一人でも多くの人に、そのことを伝えることだと思ふ。伝えることによって、興味を持ってもらえばかならず何かパヤタスの人達に出来ることがあるからである。

僕は今回パヤタスに行くことが出来て、本当に良かったと思ふ。

「いろいろ学んだパヤタス」

二ノ宮 将吾

日本人がぜいたくしすぎているのに気づきました。これを買ってなど言っていることより生きるための方が大切だと感じました。

パヤタスに行って一番心に残ったことは、やはりゴミ山でした。犬はやせ細っていて、真剣な顔で大人や子どもが食べ物など使えるものを探していました。それを見てぼくはかなしくなりました。「同じ人間や生き物として、地球上で生きていくけんりがあるのになぜパヤタスの人たちはあんなかなしい気持ちにならなければいけないのか。なぜフィリピンの人(パヤタスやまずしい人)と日本人の生活がちがうのか。」とぼくはぎもんに思いました。たちばがちがうからとか、お金がないからとかそういう問題ではないと思います。たぶん友達がほしいからかなしい顔をしているのではないかとぼくは思います。そのためぼくはあやとりを教えたり、いっしょにゲームをしたりしてパヤタスに行きました。友達はお金でかえません。友達を作るということはとても楽しいことだと思います。悲しい時や、くるしい時に友達がいれば、はげましてくれたり話しかけてくれたりして自分を元気にさせてくれます。サバイタヨ(子どものグループ活動)をしているとパヤタスの子ども達とコミュニケーションを取りいろいろ遊ぶことができました。

このパヤタスへ行って日本人がどんなにわがままをいっているのかとてもわかりました。「日本人がふつうだと思っていることはまちがっている。本当は、とても幸せだ」と知りました。パヤタスの人でもとってもおもしろい人はいっぱいいます。みんな一人一人いいところがあるのでそれを大切にしていけばいいと思います。天才の人。おもしろい人。スポーツがとくいな人。などいます。その、とくいな物をなにかそれをどうにかしたらいいかと考えてもいいと思います。もしみつからなかったりしても必ずあるはず。それはなぜか。パヤタスの人はとてもおもしろいからです。ダンスをみせてくれた時はとてもおもしろかったです。もちろん人によってはおもしろいとか、おもしろくないとか、ちがってくると思います。でもそれ以上におもしろいのです。

その「一人一人いいところがありますよ。それは日本人も同じです。」と全校せいとにわかってもらえればとてもうれしいです。

マニラボランティア紹介

今パヤタスの現場でボランティアとして活動の手伝いをして下さっている、佐久間さんの紹介です。彼がパヤタスでどんなことをしているのか、パヤタスについて感じたことを書いていただきました。

佐久間 亮

はじめまして、佐久間隆です。僕は、今年の六月下旬からICANでボランティアをしています。毎週水曜日(お母さんグループの給料日)に、Ate NORA が担当するマイクロ・セービングの清算を再確認するのが僕の基本的な役割です。マイクロ・セービングは、ICAN が提供するママさんグループ向けの小規模金融サービスで、ママさんは貯金と借金ができます。この役割を理由にして毎週ママさん達と一緒にいると、ホントに色んなことがあり、色んなことを考えます。

僕はフィリピンに、“貧困な状況”を見て、そしてその状況に対して“自分に何が出来るか”を考えにきました。しかし、ICAN での活動は僕のこの姿勢を大きく揺さぶる気付きを与えてくれます。一つ目が、パヤタスでは貧困のような悪い状態ばかりでなく、良い所に多く気付かされるということです。確かにパヤタスでは日本ではあまりないような状況が普通に存在します。それは、劣悪な住環境、栄養不足、家庭内暴力など様々です。しかし一方で、パヤタスには日本では感じられない、いい部分がいっぱいあります。それは、アットホームな雰囲気であったり、お母さん達の力強さであったり、人と人との深い繋がりがであったりします。このパヤタスのよい所を、日本人、世界の人、またパヤタスに住む人たち自身に伝えていくのも、開発に携わりたい僕の役目だなと感じるようになりました。二つ目が、自分の非力さと、彼女たちの強さです。僕は、コーラのキャップすら空けられないのです。一方、彼女達はすごく多くのことを知っていて、力もあります。これは、僕が日本にいる時に持っていた、教科書などで描かれている“貧困者”に対するイメージとは全く違うものでした。彼女たちの持つその大きな力を上手く引き出せるように手助けするのが、僕のできることだと思います。

2004年ミンダナオ訪問記

ICANは、フィリピン・ミンダナオ島ジェネラルサントスで、経済的に貧しい子どもの就学を支援する里親プログラム、少数民族の子どもに週に一度の食事を提供する給食プログラムをおこなっています。今年の夏、里親 給食会員を対象にしたミンダナオ訪問ツアーを実施しました。過去何度も、治安の悪化のために中止したツアーだけに、現地で参加者を受け入れる Love&Life(里親支援活動をおこなう現地団体)スタッフは大変張り切って準備をし、現地ボランティアの佐藤がそれをサポートしました。給食支援対象の小学校の先生達も、訪問者を無事に受け入れられて、とても喜んでいました。簡単に日程をご紹介します。

8月18日(水)	日本 マニラ	21日(土)	ジェネラルサントス観光
19日(木)	マニラ ジェネラルサントス 給食の学校訪問 給食見学	22日(日)	教会でミサ体験、里子の家庭訪問
		23日(月)	ジェネラルサントス マニラ、休憩
20日(金)	里子と遠足	24日(火)	マニラ 日本

ミンダナオ訪問には、里親会員 3 名、給食会員 1 名の合計 4 名が参加されました。パヤタスに続き ICAN の事業地の訪問は二度目になる、伊東信明さんからの報告です。

「感銘深かったジェネラルサントス」

伊東伸明

ジェネラルサントスの初日は、広々として静かな地方的な空港から、迎いの小型トラックの荷台に乗って帽子をとばされないよう手で押さえながら、展開してゆく異郷の光景に早くも「へえー」という気分になって、最初の訪問先である給食援助をしている小学校へ向かった。子どもたちは礼儀正しくわたしたちを迎えてくれ、援助対象の子どもたちは先生に呼ばれてすなおに立ち並び、珍しい来訪者への好奇心と恥じらいを見せていた。教室は電灯がなく暗かったが、どの教室も壁に学習や生活上の指針や資料がいっぱい掲示してあり、先生のモットー、A Happy Teacher Produces A Happy Child などもあった。給食の調理場は、屋根はあるが吹きさらしの空間に炉や台があり、係の上級生が数人いて、写真を撮らせてもらった。貧しいながらも質実な雰囲気を感じた。宗教はキリスト教諸派、イスラム教、それにかなりの比率で土着宗教があるが、子どもたちの間で宗教上のトラブルはないとのこと。帰り際に校庭の子ども 2、3 人に英語でありきたりのことばをかけてみたら、ただ恥ずかしがるばかり。でも去ってゆくわたしたちの車に手を振ったりしていつまでも見ていた。

2日目は里子たちと海水浴場へ楽しい遠足。ホテルで初めてお母さんに連れられたわが里子、7歳のジンジンちゃんと会った。スリムで丸い目をしてとても恥ずかしそうにしていた。内気な子かなと思ったが、実際は大違いであることがあとですぐわかった。他の子どもや家族、現地スタッフらとともに貸し切りのジブニーで、Love & Lifeの事務所に寄ってからまぐる漁港を見学した。荷揚げ場では労働者たちが、筏にびっしり並んだ大きなまぐろを一匹ずつ、首まで海水に浸かって担いで上がってくる。光景にしばし見とれてしまった。この漁港と市場の光景はいつまで見ても飽きないくらい。漁師であった祖父のことを思い出してしまった。海水浴場では子どもたちが大はしゃぎ。ジンジンちゃんはここで本領発揮。赤い水着で長時間、他の子たちを仕切りながら、唇が紫色になってもほとんど浸かりっぱなし。食事に上がって来てこんどはカラオケ。海岸に2列にずらっと並んだあずまや風休憩所には、ほぼ1つおきにカラオケ設備があり、他の地元グループも大いに楽しんでいた。マニラでの夕食のレストランで見たカラオケ風景とともに、フィリピンでのカラオケの盛況ぶりを知る。折り紙と並んで日本が生んだ世界に誇るべき大衆文化、カラオケ！

3日目は、アメリカ資本の広大なパイナップル農園に目を見張り、そのあとのショッピングセンターでは、見て回るだけでくたびれて喫茶店でしばし休憩。ホテルに戻ってから徒歩で出かけた市場では、珍しい品々や人々の表情など迫力ある雰囲気圧迫された。

日曜日は教会のミサに参列した。教会堂はコンクリートブロックむきだしの壁、鉄パイプの梁にトタン屋根といった建物、手書きの賛美歌の歌詞が吊下スクリーンにOHPで映し出され、吹き込む風でひるがえるなど、全体に質素なものであったが、ぼくにはかえって味わい深く感じられた。速いテンポのゴスペル、静かな賛美歌、地域の若者の音楽演奏。牧師さんの説教は基本的に英語で、土地柄・時節柄 peace, human relations などの強調された内容だったと思う。献金があって最後は人々のなごやかな交歓。われわれ日本人来訪者には意識的に説教でも触れられ、聴衆の歓迎を受けた。わたしはここでジンジンちゃんと両親と兄妹とにお会いした。持参したゲーム類・バッグ・お菓子などの手みやげをお渡しし、しばし歓談。この時お宅を訪問するよう招かれたが、スタッフに確認するとやはりまだその地域には治安上の不安があるとのこと、残念ながら訪問できなかった。

でも、この地域のおかれている状況の一端を実感することではあった。この後、みんなでショッピングセンターに行き一緒に昼食をとり、歓談の中でさらに里子のご家族の状況などをうかがった後、お別れをした。さらにその後、田中さんの里子ジェイマー君の家を訪問。質素ではあるが豚と鶏が飼ってあって、終戦直後、母の実家の農家に疎開していた時の生活をぼくは懐かしく思い出してしまった。

5日目、朝ホテルを出る直前にジンジンちゃんのお母さんがわざわざまた訪ねて来られ、われわれに織物やネックレスをプレゼントしてくれた。この南国風、ethnic な模様の麻(?)織物は今我が家の壁を飾っている。またいつか来たいですと言ってお別れした。

ジェネラルサントスは、東京ともマニラとも違う大きな地方都市で、中心部は道路は広く交通も混雑しているが信号はほとんどない。そしてジブニー(ジープ型の乗合バス)よりもトライシクル(台車付の三輪自動車)が圧倒的に多く、われわれも何度も利用した。道の舗装はあまりよくなく、本道はずれるとでこぼこ道で、トライシクルは大きくゆれる。振り落とされないよう取っ手や屋根につかまりながら、ぼくはそんなところにも異郷の情緒を感じてしまった。



ジェネラルサントスのまぐる漁港



ミンダナオを訪問したメンバー

教師といった、ある意味であまり堅気でない商売をしてるぼくには、きっかけが何であれ、知らなかった土地でそこに住む普通の人たちの暮らしぶりに触れ、自分のとかく狭い世界を少しでも広げられたことが、理屈ぬきに楽しかった。このような機会を与えてくれた、援助される側のみなさんや援助組織に関わる方たち、そして今回の旅を大いに盛り上げてくださった同行のみなさんに、あらためてお礼を申し上げます。

緊急！里親募集

フィリピン・ミンダナオ島の子どもたちへの支援を！

～学校に行きたい子どもたち、学校に子どもを行かせたい親たち、この思いを実現させるために～

ICANではミンダナオ島、ジェネラルサントス市で活動する現地NGO、Love & Lifeを通じて、貧困家庭の子どもたちが学校教育を受けられるよう里親事業を続けており、今年度は小学生、高校生あわせて160名を支援しています。

緊急！今年度の里親が不足しております。 不足分はICANより学費等を支給しておりますが、このような状況が続きますとこのプログラム事態の存続が難しくなります。残りの期間も少ないですが、今年度の里子の支援を引き続き募集しています。里親プログラムへのご理解を頂き、会員の方が一人でも増えるよう皆様のご協力をお願いいたします。

年会費： 18,000 円

★ お預かりした会費のなかから里子に対して1年間の学費、制服、交通費などを支給します

<里子の家庭について>

多くの親たちは、定職を見つけるのが難しい状況です。その収入も少なく、子どもの数も多いため支援なしでは子どもたちを学校に行かせることは非常に困難です。このプログラムでは特にそのような家庭の子どもたちに焦点をあて支援しています。

初心者の為のフィリピン講座～

フィリピン訪問編

Vol.4

里村京子(元青年海外協力隊)

フィリピンに行って驚くこと・・・

その1. 貧富の差

マニラに着くと、高層ビルに高級ホテル、行き交う車の多さに驚きます。日本料理に中華料理、イタリア料理にドイツ料理、インド料理も地中海料理もあります。ショッピングモールには高級品も売っています。ここが途上国？と、始めは驚きました。でもすぐにこれらがごく限られた小数のお金持ちと外国人のためにあることが分かりました。少数のお金持ちと、大多数の貧しい人々。中間層がとても少ないため、余計に貧富の差を顕著に感じます。お金持ちはどこまでもお金持ちで、貧しい人はいつまでも貧しい。それでも底抜けに明るい人々・・・貧富の差と人々の明るさに驚きます。

その2. 銃の多さとセキュリティ

フィリピンはライセンスさえあれば銃を所持することができます。高校生には兵役訓練のようなものもあり、銃の扱い方を知っている人も多く、簡単に手に入ります。私のホームステイ先にも夜になるとショットガンを持った警備員さんが立っていました。町では、どんな小さな商店でも入り口にはショットガンやピストルを持った警備員が立っています。(ほとんどの場合彼らの仕事は入り口の扉の開け閉めなのですが・・・)お正月には爆竹代わりに発砲する人もいるし、酔っ払った勢いで親友を撃ってしまったり、子供が遊んでいて誤って家族を撃ってしまったなんていう事件も少なくありません。誰が銃を持っているか分からないので、何か腹が立つことがあっても少々のことなら逆上しないほうが安全です。強盗に出会ってしまった場合も、抵抗しない方が安全です。また、ショッピングモールや映画館に入るときには、爆弾テロを防止するためにかばんの中の荷物チェックがあります。

ちょっと怖いこともいろいろ書きましたが、私は2年間住んでいて一度も怖い思いはしませんでした。起こりうる危険を予測し、自分で危険を回避する心構えを持って行くことは大切ですが、必要以上に恐れる必要はありません。海外旅行の魅力は「食べ物」や「美しい風景」等いろいろありますが、フィリピンの魅力は「人そのもの」！やさしくて明るい人々との出会いは必ずかけがえのないものになると思います。ぜひ一度行ってみたい下さい！

～ 春のスタディツアーのお知らせ ～

2005年2月25日(金)～3月9日(水)に、先住民族が生活する山村サンイシロとマニラ首都圏のパヤタスを訪れるスタディツアーを実施します。今回は、都市と農村を訪れ、その暮らしの違いについて考えます。

内容:サンイシロ・パヤタス訪問ツアー

(農村と都市の違いを考える)

日程:2005年2月25日(金)～3月9日(水)

定員:15名(予定)

費用:160,000円

(渡航費、現地移動費、食費、滞在費等を含む)

*また詳細は事務局までお問い合わせください。

【スケジュール(予定)】

- 2/25(金) 出発
- 2/26(土) 移動,オリエンテーション
- 2/27(日) サンイシロへ移動
- 2/28(月) サンイシロ滞在
- 3/1(火)
- 3/2(水)
- 3/3(木) マニラへ移動
- 3/4(金) パヤタス滞在(ゴミ山見学等)
- 3/5(土) (ホームステイ)
- 3/6(日) 振り返り,マニラ訪問等
- 3/7(月) 帰国

新規会員, 会員継続者, 寄付者のご紹介

新規会員

里親会員

小笠原敬一さん、鈴木一成さん、石川純子さん、氏家美奈絵さん

給食会員

諏訪まさよさん、熊本みどりさん、渡部愛さん

パヤタス会員

小笠原敬一さん、

一般会員

鈴木一成さん

会員継続

一般会員

伊藤美里佳さん、龍田麻子さん、中島浩子さん、
伊藤洋子さん

里親会員

内山裕さん、大西咲子さん、河野亮さん、木村史子さん
中島知子さん、堀直予さん、北本統一さん、
横溝美智子さん、寺田達志さん、

給食会員

石谷泰枝さん

パヤタス会員

音羽佳子さん

ご寄付

山田さん、大西貴志さん、梅村裕二さん、関西学院エコナビタットのみなさん、
石川由美子さん、さかいさん、加藤孝志さん、いそがやさん、かもしたさん、
岡田喜美江さん、イシシ高校のみなさん、神戸小6年生のみなさん、
草の根援助運動のみなさん、福富幸恵さん、名古屋大学国際開発学科のみなさん、
吉田浩子さん、大西咲子さん、音羽佳子さん、大城和子さん、園原ゆりえさん、
河野亮さん、龍田麻子さん、岩崎さん、中野さん、向陽高校のみなさん、
平子悟さん、東邦高校のみなさん、倉茂和幸さん、小笠原勝巳さん、諏訪まさよさん、
田中明美さん、伊藤伸明さん、城砦中学校のみなさん

ご協力者

文房具寄付 集まった寄付 16,800円

大橋るみさん、竹宮純子さん、瑞陵高校のみなさん、
三島中学校3年生のみなさん、浅田愛さん

未使用テレカ 集まった寄付 19,350円相当

黒澤伸之さん、辺見麻紀さん、大矢真希子さん、

書き損じ葉書 6,030円相当

小熊広也さん、サントリー研究所のみなさん、河野亮さん

ありがとうございます！今後とも変わらぬご支援をお願い申し上げます。

(2004年8月～10月末日まで)

<HAPPY NEW YEAR Card を送ろう！>

ミンダナオ、ジェネラルサントスの小学校の子ども達をカードで励ますカードキャンペーンを行います。今回は、これまで文房具や給食の提供で交流のある Bawing 小学校、Sarif Mucsin 小学校、P.Kindat 小学校、の子ども達を励まします。

彼らへの励ましのカード作り、カード集めにご協力下さい！

カードの形式

- (宛先) Dear Friend にして下さい。
- (差出人) 名前だけ英語で記述し、住所は書かないでください。
- (内容) 英語で書いてください。子どもたちの英語力が高度ではないため、文章は少なめで簡単な内容にとどめ、絵やシールなどが多いほうが喜ばれます。
- (形式) 既成の絵はがき、二つ折りカードのサイズでお願いします。
1通ごと封筒に入れてください。
- (期限) ICAN 事務局に、12月10日必着で送って下さい。
- (宛先) 〒450-0003 名古屋市中村区名駅南 1-20-11 NPO プラザ 2F ICAN
- (その他) 一通につき 40円(切手可)ほどのカンパをお願い致します。

*また分からないことがありましたら、事務局までご連絡ください。

クリスマス & 年末募金キャンペーンのお願い

日頃はICANの活動にご理解とご協力を賜り、本当にありがとうございます。

フィリピンでは、国民的行事でもあるクリスマスの季節が近づいてきました。ICANでもパヤタスやミンダナオ、サンイシロで暮らす住民のみなさんが、家族そろってクリスマス・年末を迎えられることを願って、活動を続けております。

現地での活動を続けるためにも、みなさまからの暖かいご協力をお願い致します。

ご送金いただける方は、以下の振替口座までお願い致します。

【口座名】 NPO法人 ICAN

【番号】 00850-6-78233 *通信欄に、「クリスマス & 年末募金」とご記入ください。

みなさまの暖かいご支援を、心よりお待ち申しあげております。

会員になってICANの活動を支えよう！

(ICANの活動は会費と寄付金で支えられています。事業会費・事業寄付金は20%が運営費、80%が事業費となります。正会費、運営寄付金は全て運営費となります。)

(1) 貧困家庭のための里親制度 (年会費1万8千円)

一定収入に満たない家庭の子どもに学費・学用品費・医療費等を支援します。1対1の支援です。

(2) ミンダナオの小学校での給食提供 (年会費6千円)

少数民族の小学校で、先生や保護者の方と一緒に、栄養不良児に給食を提供しています。

(3) パヤタス支援 (年会費6千円)

ごみ拾いで生計を立てている住民が多くすむパヤタスで、職業訓練や医療支援を行っています。

(4) 山村教育支援 (年会費6千円)

山村サンイシロで、先住民のために、未就学児童やハイスクール生等の教育支援を行っています。

(5) ICANの運営等の活動全般へのご支援 (一般会費3千円, 維持会費1万円)

活動全般を支えて頂く正会員です。翻訳や事務局を手伝って頂くボランティアも募集しています。

会費と寄付金の振込先

- ・郵便振替) NPO法人 ICAN, 00850-6-78233
- ・UFJ銀行) 名古屋駅前支店 普通 2361021 NPO法人 ICAN (エヌピーオーホウジンアイキャン)
- ・E-BANK) 支店番号 210 口座番号 7001258 特定非営利活動法人 アジア日本相互交流センター
- ・JAPANNET BANK) 店番号 001 口座番号 4005809 特定非営利活動法人 アジア日本相互交流センター

お問い合わせは、ICAN事務局まで (受付時間: 火~土 13時-17時)

〒450-0003 名古屋市中村区名駅南1-20-11 NPO プラザなごや2F

TEL&FAX (052) 582 2244 E-mail : info@ican.or.jp ホームページ: <http://www.ican.or.jp/>